　新潟県の林康一朗さんが住職を勤めておられる圓性寺様、等覚寺様の報恩講、本願道場の御縁を終えて、十月三十日朝、林さんの奥様である弥生さん、長女の果音（かのん）ちゃん、五月に誕生したばかりの御長男慈（いつき）君の三人に新幹線ホームまでお見送り頂き、私たちは上越妙高駅十時四十三分発はくたか５５５号に乗車、帰路につきました。常照さんが感慨深く言いました。「穴を開けずに終えることができた・・・」。

　十月は、日程を見ては大丈夫かなと思われ、周囲の方も大丈夫ですかと心配して下さいました。結果は、穴を開けることなく責任を果たさせて頂けました。おかげさまです。先を見ず、目の前の御縁に集中していました。一回一回、お迎え下さる方、お参りに来て聴聞される方の真剣な姿勢にお力を頂き、育てられ護られていました。背後に如来様がおられるので、乗被願力、如来様の願船に乗せられての法の旅なのでした。

　こうして書かせて頂いていると、お参り下さった方々のお顔が浮かびます。皆様の心の中にはたらく法蔵菩薩の願いが、それぞれの本願道場の原動力なのだとあらためて知らされます。大石先生が広島からこの中津へ毎月ご出講くださった十数年間が土台にあります。改めて深く深く遠き宿縁を慶ばせて頂きます。

　新潟の御縁を終えて、最後に私たちには日程には書いていないもう一つの予定がありました。新大阪でサンダーバードを下車、電車を乗り継いで、次男のアパートへ向かいました。　前日がちょうど道人さんの四十才の誕生日だったので、三人でお祝いをしようと計画しておりました。

　アパートに着くと、いつもながら部屋は綺麗に整えられ、道人さんが迎えてくれました。常照さんが座れるように向きを変えて自分の座椅子を置いてくれています。前回、常照さんがヘルニアで腰痛があることを話していたのをおぼえてくれていたのです。アパートは駅に近く、とても便利な所です。私たちは少し休むと近くの居酒屋へ出かけました。時間はまだ早く、店は空いていました。常照さんが次々に料理を注文します。三人で道人さんの四十才を祝い乾杯しました。そして運ばれてくる一皿一皿を、三人でいっしょにつつき合いました。一つのお皿を分け合いながら食べるなんて、本当に信じられない光景が目の前に繰り広げられている。その現実に、私は静かな感動を禁じ得ませんでした。先生が、どこかから「ほら、こうなったじゃろ」とおっしゃっているような気がしました。なむあみだぶつ　なむあみだぶつ

南無阿弥陀仏の御恩ははかり知れません。この世で溶けあうことはあるだろうかと心配していた次男との関係が、このような日を迎えることになるとは。常照さんが道人さんに聞きました。「この四十年間はあっという間だった？」　苦笑いしながら、道人さんが頷きます。「長かった。いろいろあり過ぎて、もういいって感じ」その表情は穏やかです。私は、息子に苦労かけたのが、私の所為かもしれないという気がしましたが、口には出せませんでした。言葉は要りませんでした。親子水入らずの時間を過ごし、駅まで道人さんに見送られ、中津に着いたのは十時を過ぎていました。

翌朝、道人さんから、「昨日はありがとう！無事に帰れた？」とメールが届き、またまた感動させられました。ひと月前、小倉からの特急ソニックで、二人とも眠りこけて乗り過ごしてしまったので、心配してくれたようです。ありがたいことです。こうして十月は締めくくられました。

私たちの親子関係は、これまで紙面に書かせて頂いたり、お話させて頂いたりしてきました。このような一コマをご報告できることを、とても有難く思います。

仏法は、家庭が円満になるための手段ではありません。直接、家庭が円満になる教えを説いているわけではありません。出離生死を説いています。私は、仏法の御縁に遇いながら、自分の幸福を求めていました。真実を求めると言いながら、生活の中で不都合なことが起こると、その解決を仏法に求めていました。そのような姿勢しか取れませんでした。その姿勢自体が根本的に間違っていることに気づかないまま、気持ちだけは聞法しているつもりになっていました。そのような私に、先生がいつもおっしゃったお言葉が、掲示板に書かせて頂いたお言葉です。

「子どもさんをどうしようじゃあありません。あなたが救われなさい。あなたが救われたら、すべて解決です」。

息子が高校生の頃、今から二十年以上前のことですが、困った行動がつづく息子に手を焼いていた私は、先生におたずねしました。「私が救われたら、息子は言うことを聞くようになるのでしょうか？」先生は即座に「なります」とお応えになりました。私は信じられませんでした。「本当かな？」と半信半疑でした。その後も、先生から何度聞いたか知れません。それでも、私は、「救われたいと思っています。でも救われないのです」と心の中で不服に思っていました。冷たく突き放されたような気がして、暗く沈むのでした。そんなことを繰り返して何年か経ち、先生とはお別れしました。救われなくてはという気持ちも薄らいで、私はもうこれでいいのかなと安易に腰を降ろしていたところへ、次男が発病しました。私は自分のことはいい、息子の気持ちがなんとか慰（なぐさ）められねばと、またも、人間心の親心で息子と関わりました。次男も先生の御縁に遇わせていただき、聞法はしていましたから、続けて仏法を聞いて心に光を頂いてくれたらいいのだがと、息子が、息子がなんとかと狂奔しました。そんな私に息子が問うてきました。「歎異抄の第四章に出てくる、聖道の慈悲、浄土の慈悲があるが、念仏して、いそぎ仏になりてとは、どういうこと？」　私は応えに窮しました。自分が帰命していないことは明らかでした。帰命していないものが、「いそぎ仏になりて」を説明することは出来ません。自分が息子のところへ通うことも、雑毒の善、虚仮の行、まったく何も答えられない、これまでの聞法が何の力にもならない自分であることが知らされ絶望しました。そして不思議に、あの京都の御法座のテープ起こしを十五年ぶりに拝読することになりました。自分がテープ起こしをした原稿でした。その当時は、深く内容を頂くことが出来ずにいたのですが、自力の限界に来ていた私に、ようやく響いて下さいました。念仏往生とは、本願に救われるとは、その中で、先生がお話下さっていました。

今回新潟で、冊子「あなたが救われなさい」を御縁にお話しさせて頂こうと心に決めていました。私の帰命のきっかけとなって下さった御法話です。冊子の作成にご尽力下さった法隆さんも、お母上である坊守様、伯父様とごいっしょにお参り下さっていました。「あなたが救われなさい」というタイトルをつけて下さったのも法隆さんですから、お礼も兼ねて、そのいきさつを披露させて頂きました。この京都の御法座の中心となっておられる井上嘉弘さんは、すでに死刑を受け、この世にはおられません。また、御両親にはお便りを差し上げましたが、お返事は頂けませんでした。無理も無いことと推察致します。御両親の御心中を思い、冊子のことは大きく発表しませんでした。がしかし、御本願の世界は、私たちの想像をはるかに超えた広大な世界です。何が善であり、何が悪であるか、人間の頭でははかり知れない仏様の世界です。人間の浅はかな分別心で仏様の世界を狭めてしまっては申し訳ないのです。

圓性寺様の報恩講のお座では、林さんがお勤めのあと、法隆さんと『願生偈』を読経されました。『願生偈』は、浄土を願う天親菩薩の決意表明です。「世尊我一心　帰命尽十方　無碍光如来」ではじまります。その中にあります。

　観佛本願力　　（かんぶつほんがんりき）

　遇無空過者　　（ぐうむくうかしゃ）

　能令速満足　　（のうりょうそくまんぞく）

　功徳大宝海　　（くどくだいほうかい）

親鸞様の御和讃では次のように詠まれています。

　本願力に遇いぬれば

　虚しくすぐるひとぞなき

　功徳の宝海みちみちて

　煩悩の濁水（じょくしい）へだてなし

「お念仏は真如一実の功徳大法海なり」とは藤解照海先生のお言葉です。お念仏が、また御本願という世界が、あまりに人びとの生活から消えてしまった昨今です。しかし、現実の生活は、かつての私のように、光りが見出せず、暗い心を抱えておられる方が多いのではないでしょうか。　私は幸いにして善き師にめぐり合い、また善き伴侶にも恵まれ、この尊い仏縁を頂き、手厚くお育てを蒙（こうむ）りました。仏法の御縁がもっと広がることを願わずにおれません。私は現代教育を受け、頭で理解する傾向が強い人間でした。本を読んで知識を増やし、世界を広めるという在り方です。そういう在り方に何の疑いもありませんでした。そういう在り方を子ども達が壊してくれました。もっと大地に根差したたくましい母親になれと願ってくれていたのかもしれません。いのちといのちが呼応する関係を願ってくれていたのかもしれません。本来、いのちといのちは呼応しているのです。人間の毒された知恵が、本来のいのちを見失わせていたのかと、省みて思わせられます。

先ほど新潟からの帰り、次男に会いに行ったことを書かせていただきました。そして、親子三人で仲睦まじく食事をしたこと。あの、苦しかったときから、なにがどうなって、この日を迎えることになったのか、私にはわかりません。私は相変わらずの煩悩具足の凡夫です。自分の無智を知らされ、自力の限界を知らされ、仏様の御廻向を賜りました。炭に火がついたというのでしょうか。仏法不思議力です。

先日の十一月二日の長仁寺リモートで、林さんが総代さんの言葉として伝えて下さいました。私たち二人のお話を聞かれての感想です。「超えた人にはかなわない」「だから、思わず来年も来てくださいと頼んた」とおっしゃったのだそうです。林さんは私たちについて、超えている人と言ったことは無いそうです。さらに「自分の体験、生活から出ている言葉だから、頭（ず）が低く聞こえた。お坊さんの話は、頭（ず）が高いものだが、すごく頭（ず）が低いことに驚いた」とおっしゃったそうで、林さんは、ご本願は響くのだとお感じになったそうです。私も聞かせて頂き、とてもありがたく感動致しました。総代さんのお言葉で、江本家の業は救われたと感じました。家庭内のことを赤裸々に、度々寺報に書かせて頂いて、つくづく自分の悪業の深さに恥じる思いもありましたが、こうして江本家の業が救われたら、すべて報われます。浄土真宗は業が救われる教えです。教学を学んで知識を増やし、頭（ず）が高くなるための教えではありません。煩悩具足の凡夫が、凡夫のままで救われる教えです。その一つの例として、江本家の業が如来様に使って頂いたのなら本望です。

昨年の新潟の圓性寺様、等覚寺様の報恩講を皮切りに、本願道場を巡る法の旅が始まり、この度の御縁でようやく一年が経ちました。まだ一年しか経っていないのか、もう三年も四年も経ったような気がすると常照さんが言いますように、ずっと長く時間が経過したように感じられています。それだけ充実した中味の詰まった一年間でした。常照さんについて歩かせていただきとても勉強になりました。常照さんの法話を身近で聞かせて頂き、御信心を深めて頂けました。とにかく、常照さんは前へ前へと進んで、大勢の人の前に出る業をお持ちのようです。私は、あまり大勢の人の前に出るのは苦手です。それぞれの業のまま、如来様が使って下さいます。常照さんへの不信感となっていたことの原因もお話の中で明らかとなり、夫婦として出直す機会にもなりました。

　さて、今月より、仏教婦人会で皆さまと共に『歎異抄』を拝読することになりました。婦人会の一人の方が提案され、七月の総会で決まりました。とてもうれしいです。お念仏には無縁だった私が、現在のようにお寺に嫁ぎ、お念仏に深く帰依させて頂くことになったきっかけが『歎異抄』です。原点に戻ったような気がします。新たな気持ちで、親鸞様のお言葉に出遇わせて頂ける機会が与えられたことに感謝しております。どこどこまでも尽きない仏様の世界、有縁の皆様と共に、深めて頂きたいと願わされております。

　慶ばしいかな、心を弘誓（ぐぜい）の仏地に樹（た）て、念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀（こうあい）を知りて、良（まこと）に師教の恩厚（おんこう）を仰ぐ。慶喜（きょうき）いよいよ至り、至考いよいよ重し。これに因って、真宗の詮を鈔（しょう）し、浄土の要を摭（ひろ）う。ただ仏恩の深きことを念じて、人倫の嘲（あざけ）りを恥じず。もしこの書（『教行信証』）を見聞せん者、信順を因とし疑謗（ぎぼう）を縁として、信楽（しんぎょう）を願力に彰（あらわ）し、妙果を安養に顕さんと。

　　　　　　　　　　　　　　　　　『教行信証』化身土巻

一つ所に留まらず、「新天地へ新天地へ」と歩ませて頂きます。

　今年の彼岸法要は、御講師の御都合で一月遅れて勤めさせて頂きました。その法要にお参り下さった御門徒の奥様が、ラインに感想を送って下さいました。最後はそれをご紹介したいと思います。

　　「　（前略）　　良いお話に出会えました。わかりやすく理解できたことがいくつかあり、明日もう一度お聞きできると思うと楽しみです。

　　　お彼岸の意味や、自分を常に問う事や、だめな自分も自分に与えられたもので、人のせいではないってことなどが入ってきました。

理解できたと思う事を言葉に出すのは難しく、だから、何度もお話を聞くんだなと思いました。

（後略）　」

　一回の御縁で、大事な点を吸収されていることに驚き、すばらしいなと思い掲載させていただきました。長く聞法していると、知らず知らず耳慣れ雀になっています。自分の聞の姿勢が問われました。仏法に卒業はありません。常に自分を見つめ、照らされ、教えられて行くように願われています。お浄土の中でお浄土へお浄土への旅が続きます。

なむあみだぶつ　なむあみだぶつ　　　　　　　　　　合掌

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　法喜